

豚の滲出性表皮炎（スス病）

第2回（2回シリーズ）

開業獣医師 山本輝次

6.治療

本病の治療は、先ず早期発見・早期治療が最も大切です。

しかし、本病の原因であるS.hyicusは各種抗菌性物質に対して多剤耐性を獲得している株が多いので、絶えず薬剤感受性検査を実施することが肝要です。筆者らが、発症豚から分離した7株の薬剤感受性検査を試みた結果、バシトラシンやスルファジン、ニリジクス酸、トリメトプリムに対して全ての株が耐性を示しました。また、ストレプトマイシンやカナマイシン、キタマイシン、クロラムフェニコール、チアンフェニコールおよびホスホマイシンは低い感受性を示しました。メチシリンやセファゾリン、タイロシンおよびリンコマイシンは中等度の感受性を示し、セファロリジンは高度～中等度の感受性で、ペニシリンやアンピシリンおよびアモキシシリンは2峰性の感受性を示しました。

しかし、ノボビオチンやニューキノロンの薬剤であるエンロフロキサシンやダノフロキサシンおよびオフロキサシンは全株に対して、極めて高い感受性を示しました。特に、エンロフロキサシンはノボビオチンやオフロキサシンおよびダノフロキサシンに比べてMIC値で濃度が1段階低いMIC分布を示しました(表1)。

薬剤	希釈濃度 (mcg/ml)															
	<0.025	0.025	0.05	0.10	0.20	0.39	0.78	1.56	3.13	6.25	12.5	25	50	100	>100	
PCG	2												1	2	2	
ABPC			1	1									3	2		
AMPC			2								1	1		2	1	
MPC							1	6								
CEZ							3	1	3							
CER			2				4	1								
CEX								1	6							
SM											4	1			2	
KM									1	3		2			1	
LM									1	5					1	
SPM										4	2				1	
EM						2	3	1							1	
TS						1	5								1	
LCM							1	4	1						1	
BC													2	5		
OTC								2						5		
CP										4	3					
TP												7				
FOM													7			
NB				2	5											
SDZ															7	
NA													1	6		
OA														1	6	
ERFX			6	1												
OFLX				1	5	1										
DNFX				2	5											
TMP											4	3				

注 PCG：ペニシリン、ABPC：アンピシリン、AMPC：アモキシシリン、MPC：メチシリン、CEZ：セファゾリン、CER：セファロリジン、CEX：セファレキシン、SM：ストレプトマイシン、KM：カナマイシン、LM：キタマイシン、SPM：スピラマイシン、EM：エリスロマイシン、TS：タイロシン、LCM：リンコマイシン、BC：バシトラシン、OTC：オキシテトラサイクリン、CP：クロラムフェニコール、TP：チアンフェニコール、FOM：ホスホマイシン、NB：ノボビオチン、SDZ：スルファジアジン、NA：ナリジクス酸、OA：オキサリリン酸、OFLX：オフロキサシン、DNFX：ダノフロキサシン、TMP：トリメトプリム、ERFX：エンロフロキサシン

表1 S.hyicus 7株に対する最小発育阻止濃度(MIC)

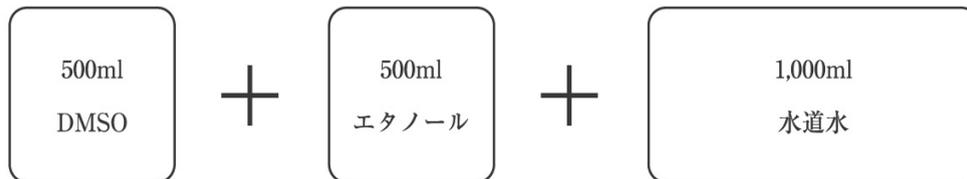
そこで、エンロフロキサシン5%製剤(バイトリル)を使って体重1kg当たり0.1mlを筋肉内に3日間注射した区を設けました。さらに、筋肉内注射を3日間投与し、同時にDMSO(ジメチルスルフォキシド)500mlと70%エチルアルコール500mlに水道水1ℓを加えた希釈液を作ります(表2)。

この希釈液100mlに対してエンロフロキサシン5%製剤1mlをその都度加え、10日間豚体噴霧した区を設け比較検討しました。この結果、エンロフロキサシン5%製剤の筋肉内注射のみの区よりも、筋肉内注射と豚体噴霧を併用した区の方が極めて回復が早いことが分かりました(表3、図1-1, 2, 3)。

この原稿は1996年の「日本の養豚:5月号」や「家畜診療」405号(1997年3月に著者らが掲載したもの)に若干筆を加えたものです。

1) 希釈液の作成

DMSO : 500ml + エタノール : 500ml + 蒸留水または水道水 : 1,000ml



2) バイトリル5%注射液1mlを希釈液100mlで希釈する。

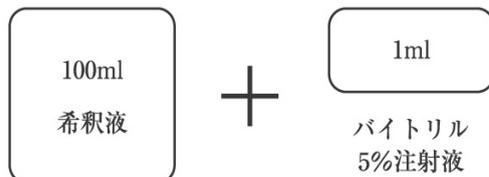


表2 豚体噴霧する希釈液の作成方法

試験区	供試豚	症状の重度および重度別平均回復日数				平均回復日数 (日±SD)
		重 度	中等度	軽 度	正 常	
筋肉内 投与 ¹⁾	離乳豚	0頭 (0%)	12頭 (80%)	3頭 (20%)	0頭	22.5 ± 7.1日
		—	23.3 ± 6.0日	19.0 ± 9.9日	—	
併用 投与 ²⁾	離乳豚	8頭 (42.1%)	5頭 (26.3%)	6頭 (31.6%)	0頭	15.4 ± 7.2日
		22.8 ± 5.3日	10日	10日	—	
	哺乳豚	5頭 (23.8%)	7頭 (33.3%)	9頭 (42.9%)	0頭	9.9 ± 5.5日
		13.2 ± 4.4日	13.1 ± 6.3日	5.6 ± 1.7日	—	

注・SD：標準偏差 1) 筋肉内投与区：3日間 2) 併用投与区：筋肉内投与3日と豚体噴霧10日間

表3 エンロフロキサシン投与による滲出性皮膚炎の回復日数



図1-1 哺乳豚に発生した豚滲出性表皮炎の重症例



図1-2 哺乳豚:併用投与区の完治例(背側)



図1-3 哺乳豚:併用投与区の完治例(腹側)